

第三十一回・第三十二回語文学会講演要旨

【岩手大学語文学会 第三十一回大会における講演要旨】

「教育・言葉・国語教育あれこれ」

岩手大学教育実践総合センター客員教授 八重樫 勝 先生

1、はじめに

*岩手大学出身であること。おかげで岩手の教員として務めることができた。現在、教育実践総合センターにお世話になっている。

*将来、教員を目指す人、社会人、親になる人へのメッセージである。

2、なぜ教師を目指したのか。なぜ国語教師になったか。

(1) 中学時代の担任のお陰である。

*免許は社会科だったが、国語を担当した。三年間の担任だった。「なぜ」「どうして」と考えさせる授業だった。

*「帰りの会」に、主に文学作品を読み聞かせてくれた。あまり本のない時代だったので、「先生」が頼りだった。

*個人日記を書き続け、物の見方、考え方を学んだ。担任の赤ペン評語を読むのが楽しみだった。今も当時の日記帳を読み

返している。

*学級全員が先生を好きだった。どの親からも信頼されていた。

(2) 高校時代の担任のお陰である。

*国語の教師であり、歯切れのいい授業だった。しっかりした文字を書く先生だった。

*「現代国語」で百点満点を取り損ねたことがある。「名前が粗末だ」と一点減点された。

*進路を決めるとき、「岩手で先生をやりたい」と相談をしたら、「岩手大学がいい」とアドバイスしていただいた。

(3) 今でも私の仕事が変わるたびに、激励やお祝いの手紙をくださる。ありがたいことである。

(4) 教育は子どもの将来をも方向づける重要な仕事である。子どもにいい影響を与える教師でありたい。

3、言葉の使い方（表現）等で気になること

*なんでも一語で表す。「ヤバイ」「かわいい」「まじ」「かっこいい」など。

*本気でないかもしれないが、聞いた方はびっくりする。「死ぬ」「死ねばいいのに」「殺すぞ」など。

*「〜とか」「〜のほう」

*「く思います」「というふうに」の多用。

*助詞の使い方。「岩大がいい」「岩大でいい」。「人間は顔じゃない」「人間の顔じゃない」。

○日本語には情緒豊かな言葉(表現)がある。正しい日本語、豊かな日本語を身につけてほしい。使えるようにしてほしい。

○言語感覚の豊かな人になりたい。言葉や表現に敏感であってほしい。

4、国語教育に携わって

(1) 教育実習

*上田中で実習。配属学級の担任が美術の先生で、国語の授業も担当していた。翌日から配属学級の国語を担当した。学級の子どもたちと完全に一体化した。

*学級経営が要であることを学んだ。

(2) 地方実習

*訪問先の先生に「君はいい先生になれる」と言われた。こういう言葉は自信になる。

(3) 上田中に勤務。く上田中で鍛えられたこと。

*「今年の教員は自信あるかも知れないが、俺の授業を見に来ない。」との先輩の指導(つぶやき)に、空き時間を先輩教師の授業を見ることに一年間使ったこと。

*学校公開の一週間前に、実習時の指導教師が来校し「俺の前で授業をやってみよ。」と言われ、何もできなかった。先輩教師は私の指導案で一通り流してくれた。先輩を案じるすごい教師がいた。

*分科会の助言で一つもほめられなかったので、「私はこう考え

て授業をした」と主張した。「おまえの授業はたいしたことないが、助言者に反論したのがいい」と評価(?)された。

*十分に準備し、自分の責任で授業をする。見て学ぶ。見られて学ぶ。打たれ強い人間になる。

(4) 教師も音読、朗読する。

*教師も書く。子どもに「十分で感想を書く」を課題にしたなら、教師は五分で書き、発表もする。

(5) 読書の勧め。読書の大切さはいまさら言うまでもない。多く読め。

5、国語教育の使命、大切さについて

*子どもたちを正しい日本語の担い手に育てる。

*新聞を読める子にする。

*最後に、国語教育の大切さについて、数学者藤原正彦氏の論を紹介する。「二に国語、二に国語、三、四がなくて五に算数、後は十以下でやっていくべきです。なぜ国語が中心であるべきか。一番目の理由は、言語を学ぶという目的があるからです。生活するうえでも、国語は全ての出発点です。二番目は、国語をきちんと学ぶことで論理的思考力が身につく。(中略)四番目の理由は、情緒力を育てるためです。・・・美しいものに感動する力、他人の不幸に敏感になれる力、懐かしく感じることのできる力といったものは、言語や文学作品を通して育まれていくものです。」

【岩手大学語文学会 第三十二回大会における講演紹介】

「無限の器 俳句」

俳人・一関第二高等学校教諭 照井 翠先生

*【講師紹介】照井氏は、岩手大学教育学部国語科を卒業後、高校の教師として教育に携わる一方、俳人加藤楸邨氏に師事、俳人としての道を歩いてきました。句集『針の峰』『水恋臣』『翡翠楼』をまとめ、平成十四年には、「第二十回現代俳句新人賞」（現代俳句協会）を受賞しています。なお、昨年、第四句集『雪浄土』（角川二十一世紀俳句叢書）を上梓しました。

*【講演紹介】氏ははじめに、『俳句』（角川書店、平成20年4月号）に「私の『切れ』論」というテーマで掲載された、俳論「欠落の美」をもとに、俳句の「切れ」の特質について話された。氏は「切れ」とは「断絶であり、欠落である。」としただけで、『切れ』という断層によって分かれた二つのものは、一見何ら調和していないかのように見える。その『不調和』なものを、読みの力によって『同化』させ、より一層豊かな『調和』という高みに至らしめる。読み手が、緊密に対峙する二つの素材の関係を想像し、不完全な表現を補ううちに、いつしか二つのものが融合し、一つのイメージへと結びついていくというプロセスは、まさに創造そのものであり、『切れ』によって生まれた新たな関係性と言えよう。『切れ』において、叙述されない『欠けた』部分は、読み手の心の中で絶えず想像され、再生され続ける。この『欠落の美』と、そこに生まれる『欠落の力』こそ、『切れ』の本質であり恩寵ではないだろうか。」と述べ、さらに、『切れ』とは何もその一瞬の、その空間だけの往還とは限らない。例えば、百年千年という長大なスケールの時間や壮大な空間を往還することも可能となる。この『俳句の時空』は、極めて重層的な構造で、一句に厚みと広がりをもたらしている。」と持論を展開された。この「切れ」によって「この世とあの世を往還すること」も可能となる。また、「虚空没入。自他一如」という

言葉を引かれ、《ものに見とれる》ことの重要性を強調された。後半、そのことが、芭蕉の教えそのものであることを「真実感合」という言葉でまとめられた。（文責・中村）